

奈良文化財研究所

本庁舎建設の

あゆみ



平城京右京一条二坊・二条二坊・
一条南大路・西一坊大路の調査

2018



独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所



1952～1980

奈良文化財研究所は、文化庁の前身である文化財保護委員会の付属機関として、1952年に設立されました。発足時の庁舎は、奈良市春日野町50番地に所在した建物で、1902年に竣工し、奈良県物産陳列所、奈良県商品陳列所、奈良県商工館として使用された建物でした。設計者は平城京研究の先覚者であり、日本建築史の基礎を築いた関野貞博士です。

この建物は、1980年まで奈良国立文化財研究所の春日野庁舎として使用されました。奈文研の二条町移転後に、明治中期を代表する近代和風建築として高く評価され、1983年に重要文化財に指定されました。現在は奈良国立博物館の仏教美術資料研究センターとして使われています。

1980～2014

奈文研の業務と組織が拡充し、特別史跡である平城宮跡の発掘調査と保存整備事業が本格化したため、1980年に平城宮跡の西辺に隣接した奈良市二条町に本庁舎を移転しました。二代目となる本庁舎は、1964年に建築された奈良県立奈良病院の建物を、国が奈良県から1978年に購入し、翌年にかけて改装したものです。当時、平城宮跡発掘調査部と埋蔵文化財センターが平城宮跡内に分置されていましたが、これらを本庁舎に統合するかたちで移転しました。

本庁舎は3階建て（延べ床面積6,721㎡）で、2014年当時は1階の北部に研究支援推進部、南部に図書資料室、2階に所長室と都城発掘調査部、3階に文化遺産部と埋蔵文化財センターが配置されていました。また、敷地南部に宿泊施設を備えた研修棟があり、全国各地の研修生と奈文研職員が昼夜交流を深めました。



2014～2018

新庁舎の建設にともない、平城宮跡内の佐伯門跡の東側に建てられたプレハブの仮設庁舎で、2014年1月から新庁舎完成までの約4年半を過ごしました。

仮設庁舎はプレハブの2階建て建物2棟（延べ床面積5,245㎡）からなり、2階は渡り廊下で繋がっていました。南棟の1階に所長室と研究支援推進部、2階に企画調整部、文化遺産部、埋蔵文化財センター、北棟の1階に図書資料室、2階に都城発掘調査部および研修室がありました。夏の猛暑日や冬の厳寒期をプレハブで過ごした経験は、いずれ懐かしい思い出となることでしょう。



2018～

奈文研の創設から66年、2018年3月に完成した新庁舎は、奈文研にとっては三代目の本庁舎です。そして、はじめて、奈文研のために新設された庁舎となります。旧庁舎は老朽化が進み、調査研究資料の増加による庁舎の狭隘化と耐震性といった深刻な問題を抱えていました。そのため、建て替えが強く望まれました。

ようやく2012年に設計費が予算化され、2013年から2015年の3年国債での建設工事が決まりました。2014年、旧庁舎の解体と並行して発掘調査に着手しましたが、予期せぬことに、建設予定地に平城京の条坊道路や秋篠川旧流路を埋め立てた遺構が残存することが判明しました。このため、文化庁をはじめとする関係機関と協議を重ね、新庁舎の建物位置や構造、工法を大幅に変更して、遺構の保存を図ることにしました。こうして計画から2年遅れ、ようやく2018年3月末に新庁舎が完成しました。



ごあいさつ

このほど待望の奈良文化財研究所の新庁舎が完成し、無事落成の運びとなりました。

これもひとえに皆様の日ごろのご支援の賜物と深く感謝申し上げます。

この新庁舎は、奈文研の三代目の庁舎にあたります。1952年に創設された奈文研の初代庁舎は、奈良公園内にある旧奈良県物産陳列所で、我が国の建築史研究の第一人者であり、平城京研究の先覚者でもある関野貞博士が設計した由緒ある近代和風建築です。

二代目の本庁舎は、平城宮跡に隣接する旧奈良県立奈良病院の建物を改修した建物で、1980年、当時平城宮跡内に分散していた平城宮跡発掘調査部と埋蔵文化財センターを統合する形で移転しました。この建物で35年余りを過ごしましたが、築後半世紀を経て建物の老朽化が進み、狭隘化と耐震性が問題となり、今回の新庁舎建設の運びとなりました。

順風満帆に見えた新庁舎建設計画でしたが、建設予定地の発掘調査によって、旧秋篠川の氾濫原と想定していた場所から、平城京の条坊道路や秋篠川旧流路を埋め立てた遺構が発見されるという予期せぬ事態が発生しました。このため遺構の取扱いをめぐって、文化庁をはじめとする関係機関と協議を重ねた結果、新庁舎の建物位置や平面プラン、床面積、地下構造などを大幅に変更して遺構の保存を図ることとし、基本設計・実施設計を一からやり直すことになりました。新庁舎の完成が2年遅れる結果となりましたが、人間万事塞翁が馬、地下遺構と共存する奈文研らしい新庁舎になったのではないかと思います。

新庁舎の建設にあたりまして、地下遺構の保存と工期の延長、予算面などで、文化庁と独立行政法人国立文化財機構の甚大なるご支援とご理解を賜りました。また、新庁舎の建設に携わった関係者の皆様に対しまして、心からお礼を申し上げます。

この新庁舎完成を一つの節目として、奈文研所員一同、心新たに文化財の調査研究業務に邁進する所存ですので、皆様の変わらぬご支援とご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成30年6月20日

独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所長

松村 恵司

新庁舎建設の道のり

- 平成14年（二〇〇二） 奈文研本庁舎地区再開発に関する所内ワーキンググループを立ち上げる
- 平成18年（二〇〇六） 遺構確認のための試掘調査を実施（第四〇〇次）
- 平成23年（二〇一一） 平成24年度予算で奈文研庁舎新営費が認められる
地下土壌のボーリング調査を実施
- 平成24年（二〇一二）（株）日本設計が基本設計に着手
- 平成25年（二〇一三） 3年国債の建設工費が認められる
- 7月旧庁舎まわりで試掘調査を実施（第五一八次）
- 8月から仮設庁舎を建設し、12月末に仮設庁舎へ移転完了
- 平成26年（二〇一四） 3月旧庁舎の解体工事開始
- 4月発掘調査に着手（平城第五三〇次）
- 7月秋篠川旧流路の埋め立て遺構を検出
- 11月条坊道路遺構の存在を確認
- 平成27年（二〇一五） 1月遺構保存と庁舎建設をめぐり文化庁と協議を進める
- 2月建物の位置と工法を全面的に変更し、遺構保存を図る
ことを決定。1年間をかけて設計変更作業をおこなう
- 4月遺構保存に向けた追加調査を実施（第五四六・五六〇次）
- 平成28年（二〇一六） 5月再設計作業が終了、（株）鴻池組が建設工事に着工
- 3月遺構整備のための追加調査を実施（第五五六五次）
- 平成29年（二〇一七） 6月排水管理設のための追加調査を実施（第五八八次）
- 平成30年（二〇一八） 3月末 新庁舎完成

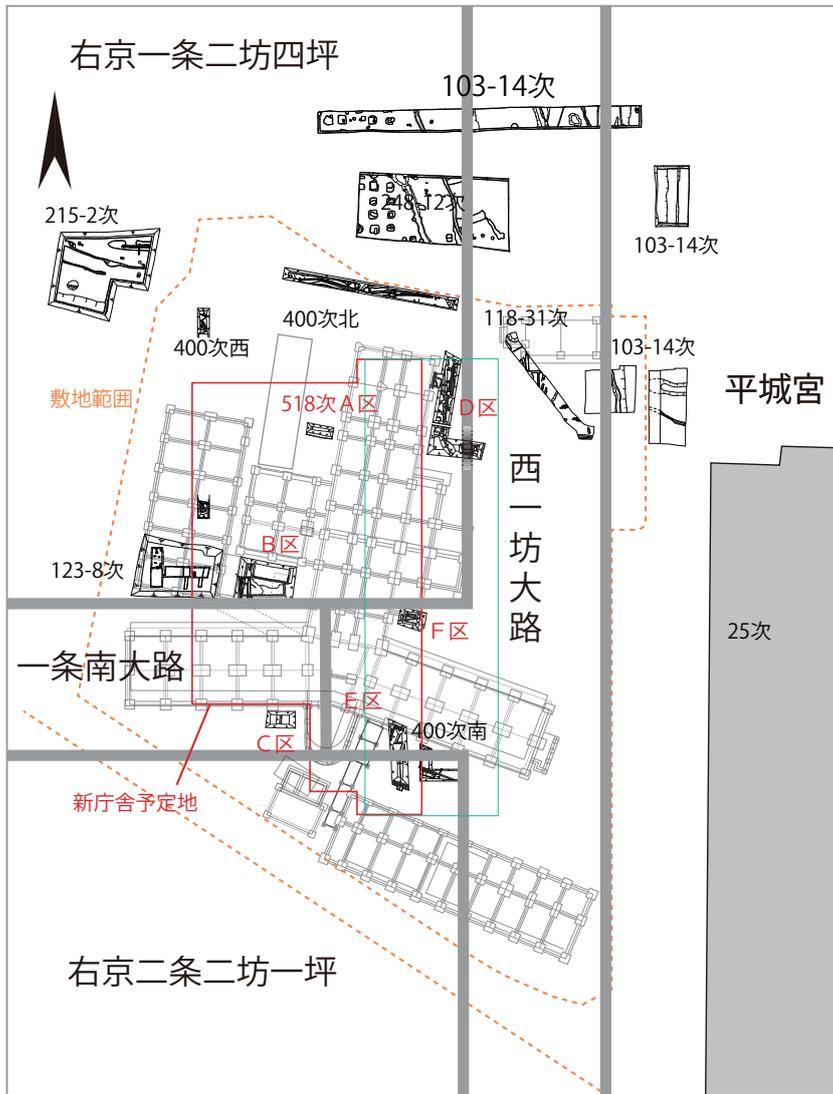
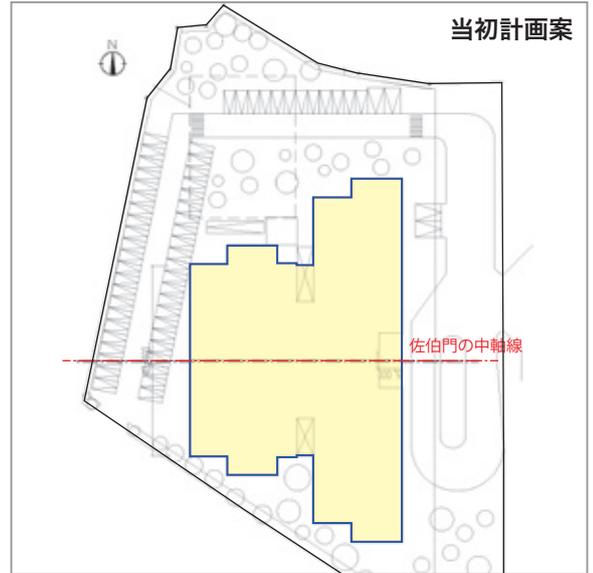
新庁舎計画から竣工までのあゆみ①

計画 設計を考え始める

2012年4月～

2012年、各部局、各世代の職員からなる新庁舎ワーキンググループを立ち上げ、将来を見据えた新庁舎の機能について、議論と意見集約をおこないました。

設計業務を担当する（株）日本設計から、複数の設計案が提示されましたが、シンプルなデザインながら収容性に優れ、平城宮の佐伯門と中軸線を合わせた案が採用されました（右図）。



試掘 遺構の有無を確認める

2006年1月16日～2月22日
2013年7月29日～9月13日

2006年、本庁舎の建替えに備えて、遺構の有無を確認するための試掘調査をおこないました（平城第400次）。それまでの周辺地域の調査成果を総合的に判断し、敷地の北端と東側に奈良時代の遺構が残存する可能性はあるものの、敷地中央と西側は旧秋篠川の氾濫原にあたと推測しました。

建替え決定後の2013年、さらに詳細に遺構の残存状況を確認するため、旧庁舎の周囲6箇所にトレンチを入れました（平城第518次）。その結果、東側のD区で西一坊大路の西側溝とみられる遺構を確認しましたが、他の調査区では旧秋篠川の氾濫原とみられる沼状堆積などが認められ、遺構は失われていると判断しました。

設計 既存の本庁舎と重ねる

2013年10月～

試掘調査の結果、既存の本庁舎がある場所は、大部分が旧秋篠川の氾濫原にあたと判断されました。このため、遺構が残る敷地東半部と北端部を避けて、建物位置を既存の本庁舎の配置にできるだけ重ねた設計に変更しました（上図赤線）。この建築計画に基づき、庁舎建物解体後の本格的な発掘調査の準備を進めました（右頁左下の図）。



新庁舎計画から竣工までのあゆみ②



惜別 旧庁舎お別れ会

2014年1月31日

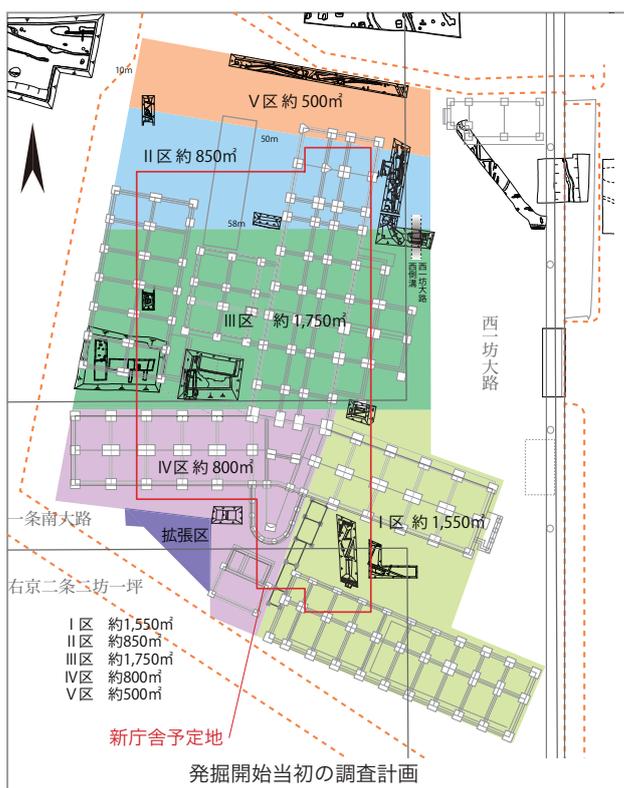
2014年1月、仮設庁舎への引越しが完了した後、奈文研のOBを招いて、旧庁舎とのお別れ会を開きました。全国各地から、この庁舎で研究生活を共にしたOBがかけつけ、旧庁舎に別れをつげました（左写真）。

解体 旧庁舎の解体

2014年3月～

2014年3月中旬から旧庁舎の解体工事を開始しました。解体の様子（右写真）も、仮設庁舎から定期的に写真で記録し、奈文研ホームページで進捗状況を報告しました。

また、地下遺構への影響がある部分は、都城発掘調査部の研究員が立ち会って、解体工事を進めました。



発掘 調査計画を練る

2014年4月～2015年2月

2014年4月14日、解体工事を追いかけるように南端のI区から発掘調査に着手しました。旧庁舎の基礎杭を撤去すると遺構を壊す恐れがあるため、基礎杭を残しながらの発掘調査となりました（下写真）。



調査の進んだ7月、斜行大溝を埋めた敷葉・敷粗朶の遺構がみつかり、調査の長期化が予想されました。このため調査計画を練り直し、調査範囲を新庁舎の建物部分に限定することにしました。

新庁舎計画から竣工までのあゆみ③

発見 条坊遺構の発見

2014年4月14日に開始した発掘調査は、都城発掘調査部の平城地区の연구원を中心に担当し、藤原地区からも연구원が参加しました。また、埋蔵文化財センターの各研究室も応援にかけつけるなど、奈文研の総力をあげての発掘調査は11ヵ月に及び、2015年2月18日に終了しました。

旧庁舎の解体工程と土置き場の関係から、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅲ区の順序で調査を進めました。9月から始まったⅢ区では、予想していた遺構検出面から約80cmも低い位置で、一条南大路の北側溝が残存していることがわかりました。

平城京の基幹道路遺構の発見をうけ、発掘調査は条坊道路遺構の確認に舵を切りました。その結果、南西の拡張区に一条南大路の南側溝も残っていることがわかりました。

いっぽうで、調査地北半の右京一条二坊四坪内にあたる部分は、奈良時代の遺構密度が薄いことを確認し、この部分については秋篠川旧流路に関連する遺構を掘り下げ、自然地形や旧流路堆積状況などをあきらかにしました。



発表 4回にわたる記者発表

新たな発見があるたびに、記者発表をおこない、発掘調査の成果を公表しました。記者発表は、発掘調査期間内に3回、調査完了後に1回おこないました。1回目は敷葉・敷粗朶工法による秋篠川旧流路の埋め立て(2014年7月4日)、2回目は地震痕跡の発見(8月22日)、3回目は秋篠川旧流路で見つかった多数の切株の発見(10月2日)、4回目は「奈良京木簡」をはじめとする発掘調査全般について(2015年3月19日)の発表です。

発信 「発掘だより」による情報発信

建物解体工事や発掘調査の進捗状況を、一般の方々にもわかりやすくお知らせするために、奈文研ホームページで週に1度、奈文研本庁舎発掘だよりを更新していきました。

2014年4月14～21日分の第1回から、2015年2月18日に発掘調査が終了するまで、発掘だよりは39回を数えました。

平城京造営の切り株、丸太?

奈良市平城宮跡、秋篠川跡から25個

切り株が多数見つかった秋篠川旧流路の発掘現場(奈良市で)一奈良文化財研究所研究員



「発掘だより」は、発掘調査の進捗状況を、一般の方々にもわかりやすくお知らせするために、奈文研ホームページで週に1度、奈文研本庁舎発掘だよりを更新していきました。2014年4月14～21日分の第1回から、2015年2月18日に発掘調査が終了するまで、発掘だよりは39回を数えました。

2014年4月14～21日分の第1回から、2015年2月18日に発掘調査が終了するまで、発掘だよりは39回を数えました。

2014年4月14～21日分の第1回から、2015年2月18日に発掘調査が終了するまで、発掘だよりは39回を数えました。

奈文研本庁舎発掘だより

第28回 2014年11月10日(月)から11月14日(金)まで

しがらみ土留めを伴う東西溝とそれに接続する南北溝について、周辺調査のデータと正確な位置情報をもとに、所内の研究者を集めた現場検討会を開きました。また、調査区西部の秋篠川旧流路では、敷葉層の広がりを確認しています。さらに、調査区北部では井戸とみられる大型の土坑を掘り下げているところでした。



①11/13 東西溝と南北溝の解釈などについて、都城発掘調査部を中心に検討会を開きました。



②11/14 秋篠川旧流路の一部を掘り下げて、敷葉層を丁寧に掘り出しました。



③11/1 調査区北部では大型の土坑を掘り下げ、

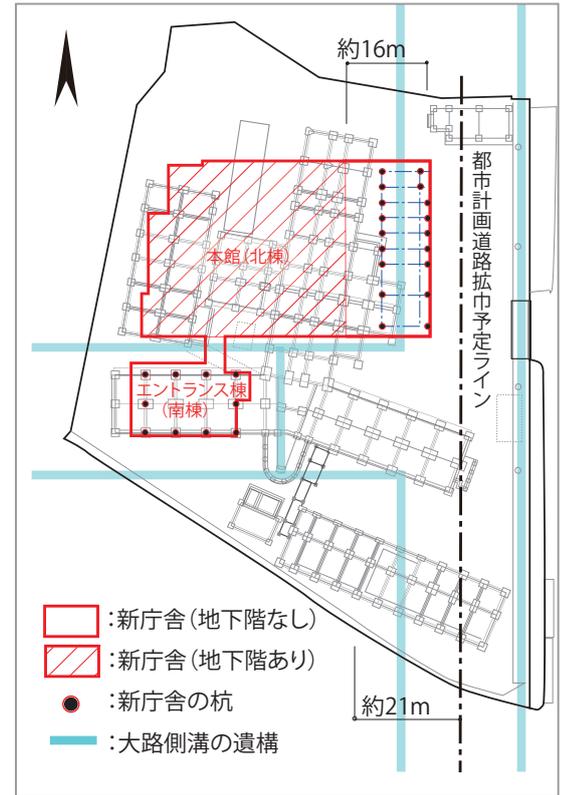


④11/14 秋篠川旧流路の北岸付近で斎串を伴う祭祀遺構が見つかり、実測しました。

変更 遺構保存と大幅な設計変更

発掘調査で検出した一条南大路と、その下層に位置する秋篠川旧流路の埋め立て遺構の取扱いをめぐって文化庁と協議を重ねた結果、遺構保存を優先し、新庁舎の建設位置や建物規模、構造を全面的に見直すことになりました。再設計には1年近い期間を要し、完成期日は当初の予定よりも2年遅れ、2018年3月末となりました。

新たな設計では、エントランスと大会議室を備えた小規模な2階建てのエントランス棟（南棟）を、一条南大路上にある旧庁舎の基礎杭と同位置に基礎杭を配置して建設し、研究室をはじめ書庫や特別収蔵庫、研修室を備えた本館（北棟）を、条坊道路の側溝を避けて、遺構の希薄な敷地北半部（右京一条二坊四坪部分）に建設することになりました。



追加 追加の調査を4回

本館（北棟）の基礎杭の打設位置の確認や、防火水槽の設置場所などを検討するため、追加の発掘調査を4回実施しました。また、ボーリング調査や基礎掘削、配管工事など、掘削を伴う工事の際には、奈文研研究員が立ち会い、竣工までのべ立会日数は50日以上を数えました。

発掘調査と期間、面積

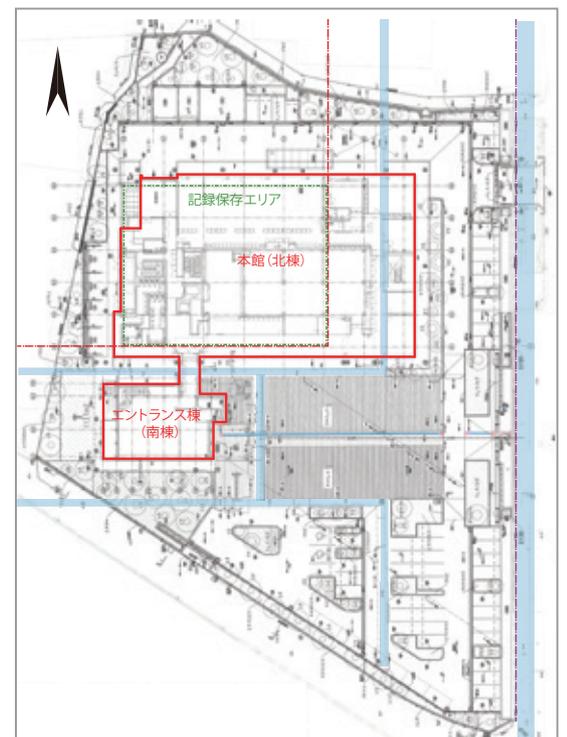
調査回数	開始日	終了日	面積 (㎡)	調査内容
第400次	2006.1.16	～ 2006.2.22	166㎡	試掘調査
第518次	2013.7.29	～ 2013.9.13	230㎡	試掘調査
第530次	2014.4.14	～ 2015.2.18	3,591㎡	本調査
第546次	2015.4.6	～ 2015.6.17	1,008㎡	追加調査
第560次	2015.10.19	～ 2015.10.30	81㎡	追加調査
第565次	2016.3.22	～ 2016.5.16	360㎡	追加調査
第588次	2017.6.5	～ 2017.6.15	42㎡	追加調査

竣工 遺構と共存する新庁舎

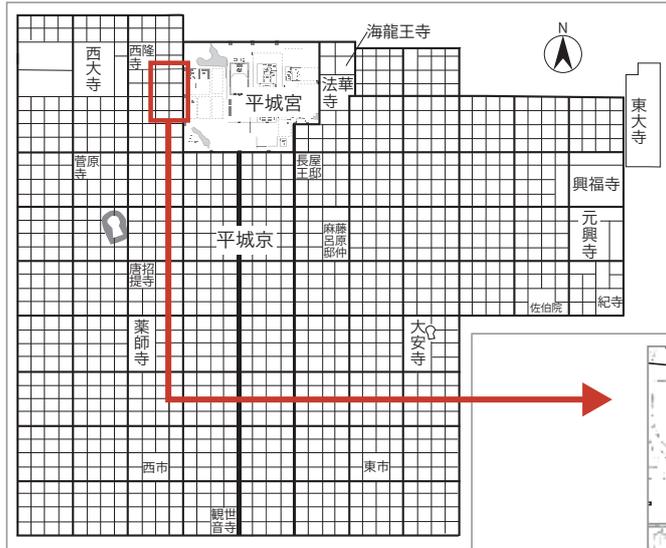
条坊道路遺構と秋篠川旧流路の埋め立て遺構の保存を図るために、新庁舎の建物位置や平面プラン、部屋の配置、地下構造などの変更の調整を重ね、ようやく新庁舎が完成しました。

新庁舎の延べ床面積は、設計変更前よりも縮小しましたが、遺構保存とナショナルセンターとしての機能を両立させた奈文研らしい新庁舎になりました。

保存した遺構は、地表に遺構表示をおこない、エントランス棟（南棟）の1階ホールには発掘調査の成果や出土品を紹介する展示コーナーを設けました。



奈文研本庁舎の敷地と平城宮西面大垣・佐伯門



奈文研本庁舎は、特別史跡平城宮跡の西に隣接し、平城宮の西面中門である佐伯門のすぐ外側にあたります。この場所は、南北方向の西一坊大路と、佐伯門から西に延びる一条南大路がT字に交差する場所にもあたります。平城京の条坊では、右京一条二坊四坪と二条二坊一坪にかかる場所です。

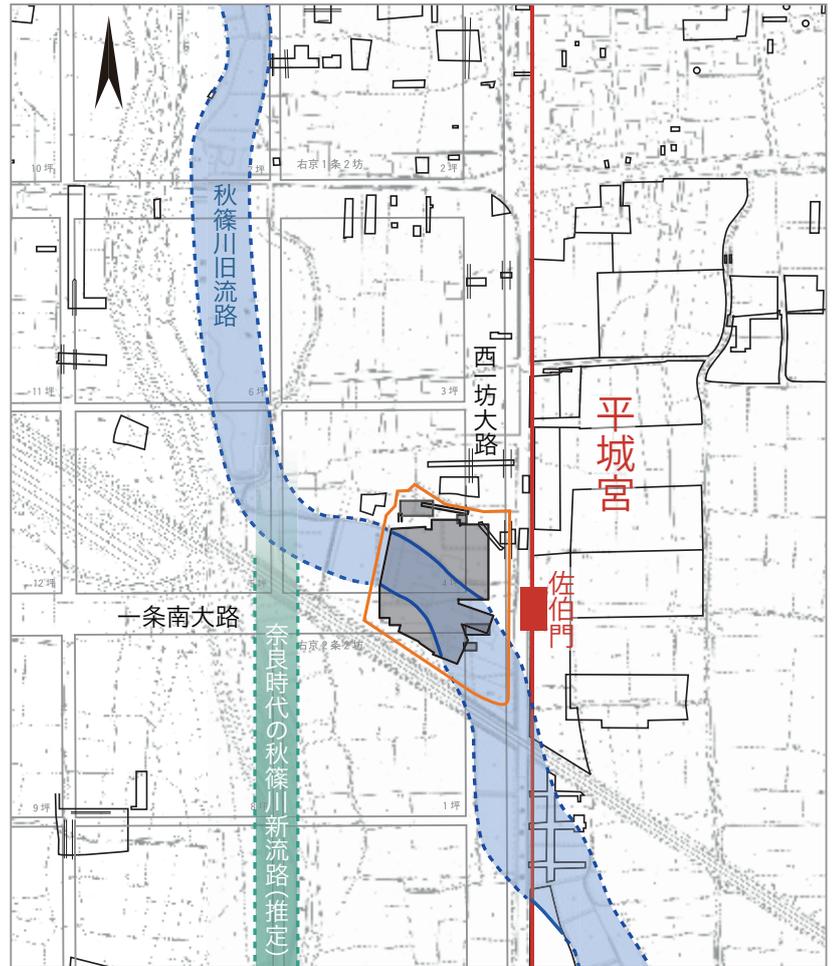
710年（和銅3）の平城遷都より前、ここには秋篠川が北西から南東にむかって流れていました。平城京造営に際し、秋篠川は条坊区画に沿うように現在の位置に付け替えられました。

周辺の発掘調査では、これまでも秋篠川旧流路の岸とみられる遺構が部分的に見つかっていました。それらの遺構をつなぎ合わせると、旧流路は右図のように流れていたと考えられます。今回の発掘調査によって、この地域では、はじめて兩岸を確認し、旧流路の川幅（約30m）を確認することができました。

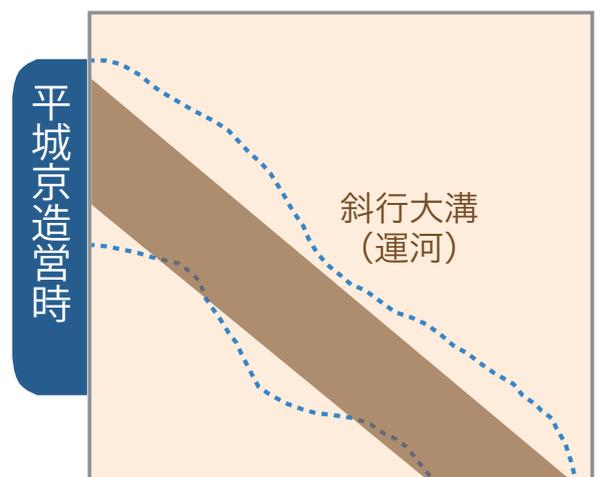
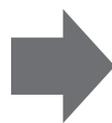
また、発掘調査の結果、平城京造営に際して、新流路を開削したのち、旧流路を斜行大溝として整備し、平城宮への物資運搬用の運河として利用していた可能性が高いことがわかりました。

一条南大路や西一坊大路の条坊道路は、敷葉・敷粗朶工法を用いて、この斜行大溝を丁寧に埋め立てて造られていることや、大路の側溝には「しがらみ」による護岸を施していることなどがわかりました。

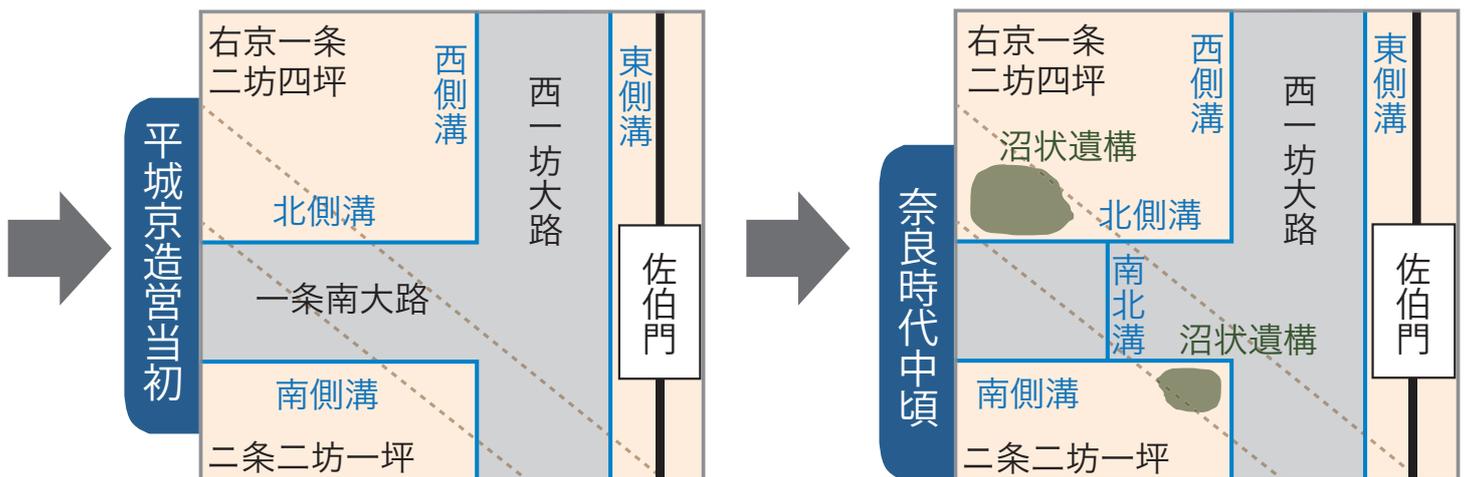
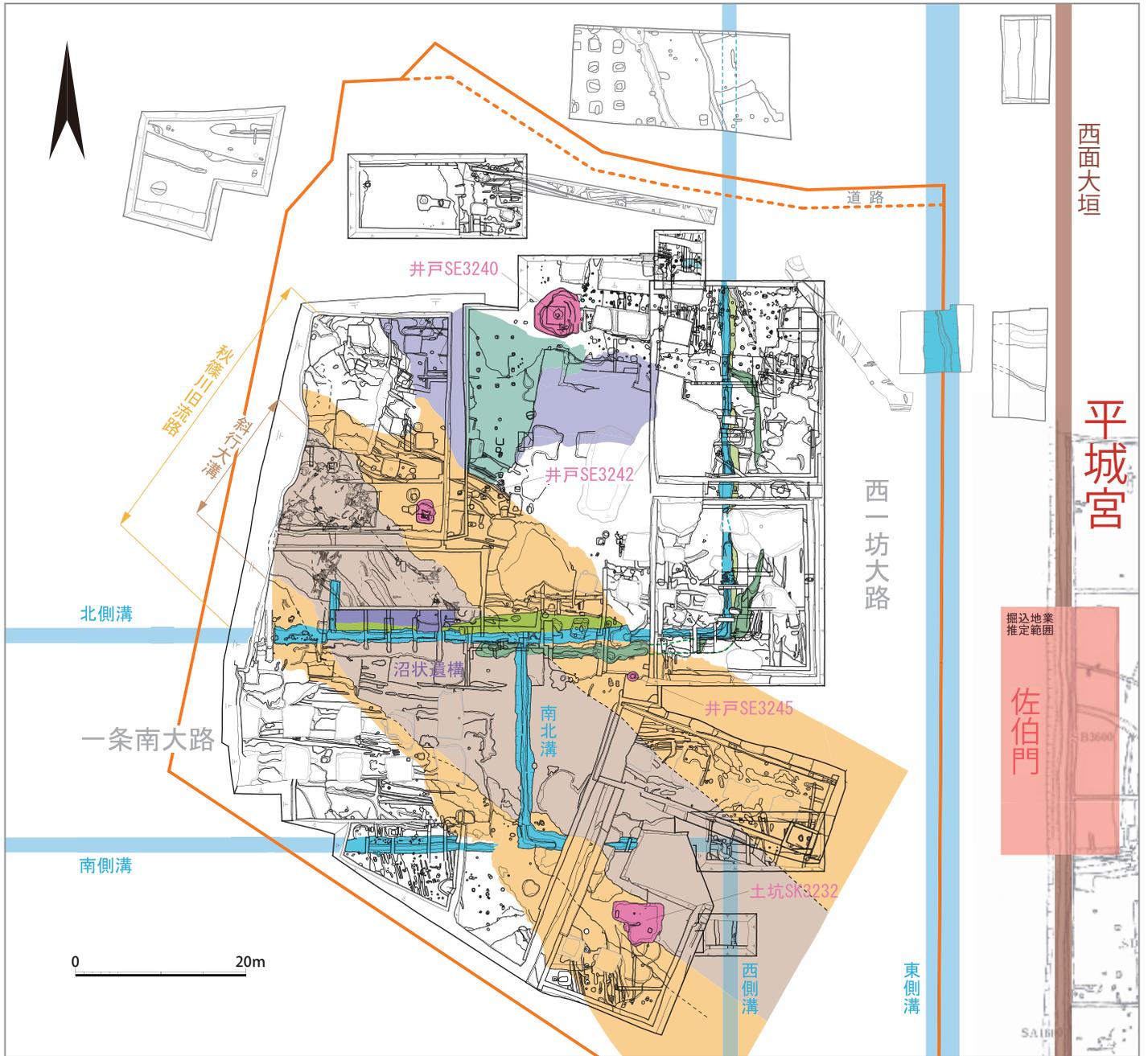
さらに、この秋篠川旧流路と斜行大溝の埋め立て地は、奈良時代には地盤沈下をおこしたことも明らかになりました。そのため、この部分の遺構面は、他の場所よりも80cmほど低い位置で検出されました。



遺構のうつりかわり



見つかった遺構と遺構変遷



自然地形と秋篠川旧流路



秋篠川旧流路は、本庁舎敷地内でやや蛇行します。秋篠川旧流路の河岸は段丘状に削られており、堆積土には、30~50cm程度の粘土ブロックを含み、時には水量が多く、流れも急だったことがわかります（写真は北西から）。



秋篠川旧流路の段丘状を呈する河岸は、薄い緑色を呈する粘土で、数万年前の地層とみられます。この粘土を覆う粗砂から旧石器が出土しました。



ナイフ型石器をはじめ、石鏃や石錐、弥生時代の石庖丁、石杵などが出土しました。また、古墳時代のものとみられる管玉や勾玉なども出土しました。



秋篠川旧流路から出土した古墳時代の土器。布留Ⅰ式～Ⅱ式の土器が中心です。南寄りからは完形品に近い土器が多く出土し、敷地南西方の高台に集落が営まれていたとみられます。



秋篠川旧流路と斜行大溝

秋篠川旧流路は、平城京の西堀川となる新流路（おおむね現在の位置）に付け替えられました。しかし、旧流路はすぐに埋め立てられたわけではなく、比較的直線状の斜行大溝に整備されました。この斜行大溝は、平城宮への物資を運ぶための運河として利用されたと考えられます（写真は北西から）。

切り株の投棄



斜行大溝の河床には、粗朶が敷かれ、その上には切り株が投棄されていました。溝の埋め立てに際して、樹木を投棄する事例は紫香楽宮などでも確認されています。また、粗朶を敷く点は粗朶沈床と呼ばれる川床保護工法との類似も認められます。これらの切り株は、波消しブロックのように護岸の役割も果たしたと考えられます。

敷葉しきは
・ 敷粗朶しきそだ
工法



平城京造営の最終段階では、斜行大溝を埋め立てて、条坊道路を施工しました。とくに一条南大路部分は、横に長い棒の上に直交させるように、30～50cmに切りそろえた粗朶が丁寧に敷き詰められていました。これは敷葉・敷粗朶工法といい、土層のずれを防いだり、湿気抜きの効果があると考えられています。同様の工法は、古墳時代にさかのぼることが確認されており、池の堤や道路の路床の施工に多用されました。



敷葉・敷粗朶を取り除くと、その下から足跡がたくさん見つかりました。人間の足跡に混ざって、ウシやウマの足跡もありました。また、敷葉・敷粗朶の間から獣骨も出土しており、死んだ役馬・役牛を、造成土中に埋めたのかもしれませんが。役馬や役牛を使った埋め立て工事の様子を、なまなましく伝えています。



敷葉・敷粗朶をきれいに掘り出す作業は、たいへん手間のかかる作業でした。



出土したばかりの葉は、鮮やかな緑色をしていましたが、空気に触れると、すぐ茶色く変色してしまいました。



(赤外線写真)

「奈良京」と書かれた木簡が出土し、話題となりました。平城京から藤原京に宛てた木簡で、「奈良」の表記が奈良時代初めにさかのぼることがわかりました。



斜行大溝は葉や粗朶を敷いた後、砂と粘土を混ぜた黒色土で入念に埋め立てられました。埋め立て工事の仕上げでしようか、斎串を用いた祭祀をおこなった遺構が見つかりました。斎串 19 本と、土師器の甕が一緒に出土しました。



一条南大路北側溝の路面側にあたる南岸には、木杭を千鳥状に打ちこんで、粗朶を編みつける「しがらみ」護岸が施されていました。これは流水によって大路側溝の岸が削られないための工夫とみられます。



北側溝からは木簡を含むたくさんの木製品や奈良時代前半から中頃までの土器が出土しました。

一条南大路の南北両側溝



一条南大路北側溝は、奈良時代に3度、掘り直されていることがわかりました。2度は奈良時代前半に同じ位置で掘り直され、3度目は奈良時代後半に、位置を北にずらして付け替えられました（写真は東から）。



南側溝は少なくとも、1度掘り直されています。護岸に杭を打ち込んだ痕跡が見つかりました（写真は西から）。



北側溝と南側溝をつなぐ南北溝が掘られました。排水に苦労した様子が偲べれます（写真は北から）。

秋篠川旧流路埋め立て地が地盤沈下



秋篠川旧流路や斜行大溝を埋め立てた部分は、奈良時代の前半に地盤沈下をおこしたようです。一条南大路の南側溝は、この埋め立てを境に約80cmもの高低差がありました。施工後、しばらくすると地盤沈下したとみられます（写真は西から一条南大路跡をみる）。この地盤沈下によって、右京一条二坊四坪と二条二坊一坪の一部は、沼状に湿地化したようです。その沼状遺構を埋めて再度、道路側溝が掘られました。



一条南大路北側溝や沼状遺構からは奈良時代中頃の土器がたくさん出土しました。

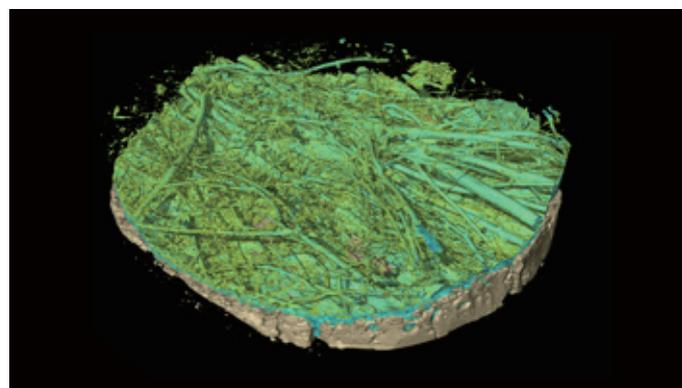


右京一条二坊四坪では、築地そのものの痕跡は見つかりませんでしたが、築地の想定位置付近から瓦溜りが見つかりました。

奈文研の総力あげての発掘調査①

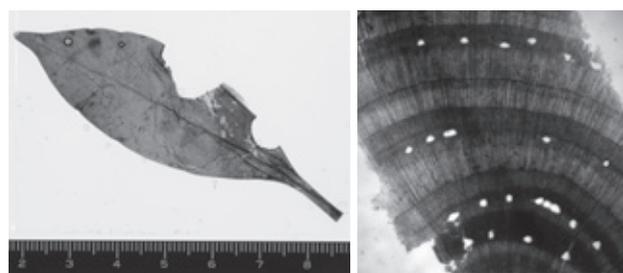
敷葉・敷粗朶の切り出し CTによる構造解析

さまざまな局面で、埋蔵文化財センターの研究員が発掘調査をサポートしました。敷葉・敷粗朶遺構を、土に覆われた状態でブロック状に切りとり（右写真）、CT スキャンによる解析をおこないました。その結果、粗朶には葉の付いた枝が用いられていることがわかりました（右下図）。



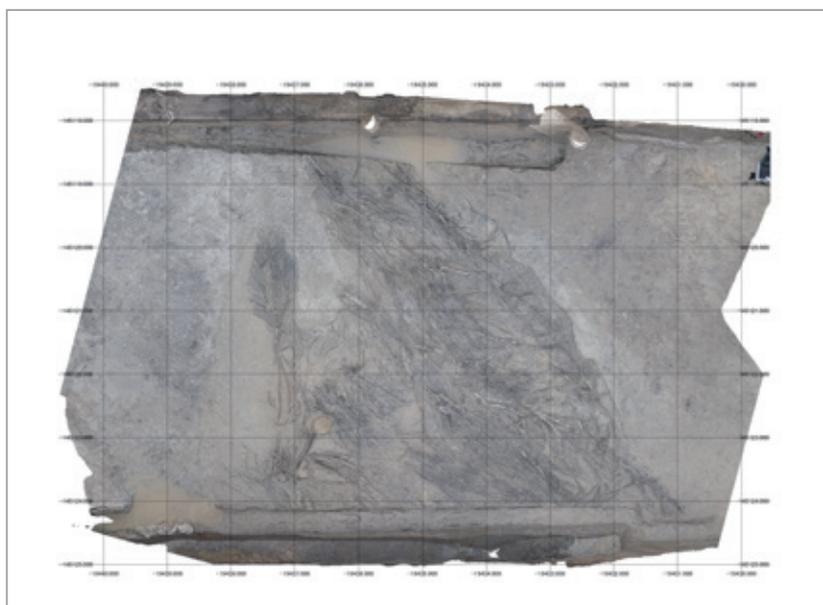
植物遺体の分析

敷葉・敷粗朶に用いられた葉や粗朶の分析（下写真）から、針葉樹や広葉樹を含み、樹種組成は近畿地方に普遍的な植生であることがわかりました。



ドローン撮影、 オルソ画像

敷葉・敷粗朶など、実測図の作成に労力と時間を費やさねばならない場面では、ドローン撮影による垂直写真や、SfM 技術を用いたオルソ画像の作成によって調査の効率化と記録精度の向上をはかりました。斜行大溝の埋め立てでは、敷葉・敷粗朶が2～3層、敷き込まれており、記録を取りながらの掘り下げを、効率的に進めることができました。また、秋篠川旧流路と斜行大溝の断面観察のために作成した断面オルソ画像は、現場での検討にも重要な役割を果たしました。



奈文研の総力あげての発掘調査②



地震の痕跡

秋篠川旧流路埋め立て地では、調査区の壁面を中心に液状化による砂脈（右写真）や噴砂（左写真）といった地震痕跡がみつけられました。この地が少なくとも3度の大地震にみまわれたことがわかります。調査所見と文献を照合すると、7世紀末～8世紀初頭、9世紀～12世紀頃、13世紀～14世紀以降に発生した地震の痕跡と考えられます。



土層転写

調査区中央寄りでは、先史時代にさかのぼる可能性がある地割れの痕跡も見つけられました。これら地震痕跡については、土壌サンプルの採取と土層転写をおこないました。今後、理化学的手法を用いた年代測定をおこなう予定です。これらの資料は、この地域における地震の履歴を研究する上で好資料となることでしょう。

動物の足あと



敷葉・敷粗朶を掘り下げると、無数の動物の足跡が見つかりました。その中には、ウシやウマの足跡が含まれることが、環境考古学研究室の分析によって明らかになりました。

写真による記録



写真室による写真撮影は、のべ47日間に及び、大判でのカット数は約1,000カットを数えました。高所作業車による撮影や、奈良県歯科医師会館のバルコニーを借りての撮影もありました。

発掘調査の成果と記憶

奈文研の新庁舎と敷地の全景

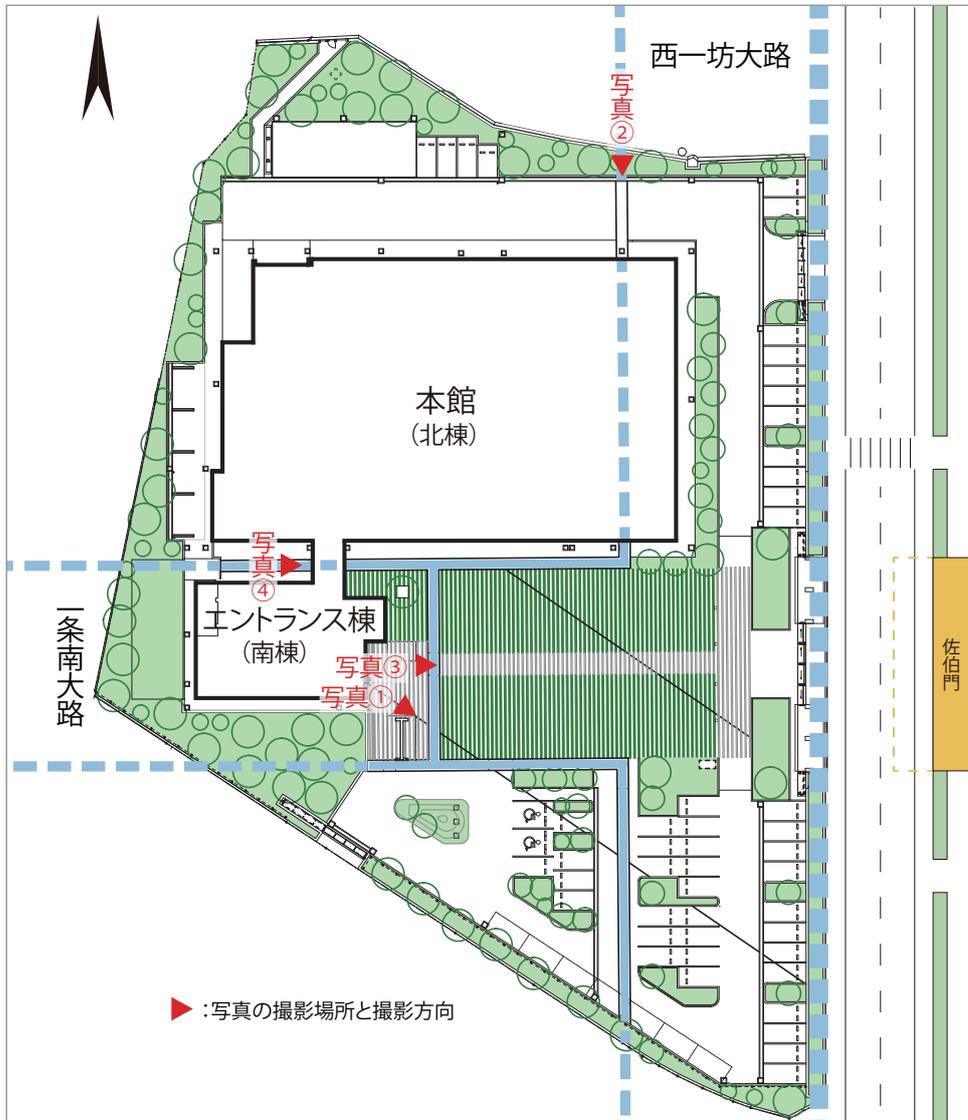


遺跡がもつ歴史的価値を、一般の人々にわかりやすく説明し、地中に眠る遺跡の保護と活用を図ることも、奈文研に与えられた重要な役割のひとつです。新庁舎では発掘調査で確認した西一坊大路と一条南大路の路面を濃灰色で表現し、条坊側溝等は黄白色の玉石敷や石貼りで表現しました。また、平城京造営時に運河として整備された斜行大溝の岸のラインも模式的に表現しました（写真は南東から）。

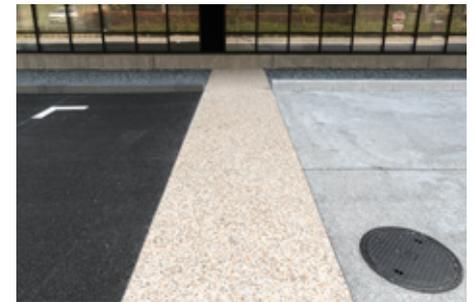


新庁舎の建設時に保存した遺構が、敷地内のどの位置にあるのかがわかるように、遺構表示に工夫をこらしました。また、発掘調査成果の概要を記した説明板を屋外に設置し、イラストや図面を使ってわかりやすく解説しました。右写真はイラストに描かれた場所の現在の姿です。ちなみに、イラスト（左図）中で大路の交差点付近のやや南寄りに3人ほど人が集まっている部分が、説明板の設置場所にあたります。

本庁舎敷地の遺構表示



【写真①】 写真中央に見える厚さ5mmの金属プレートは、斜行大溝の岸の位置を模式的に表示しています（下は拡大図）。



【写真②】 本館（北棟）の北側の黄白色の舗装は、西一坊大路西側溝を表現しています。



【写真③】 エントランス棟（南棟）入口から佐伯門に向けて延びる舗装と石貼は、一条南大路を表現しています。エントランス棟のすぐ東にある黄白色の石敷は、一条南大路の路面を横断する南北溝を表現したものです。



【写真④】 本館（北棟）の南と駐車場北側にある東西方向の黄白色の玉石敷は、一条南大路の南北両側溝を表示。路面幅は約25mあります。



奈良文化財研究所本庁舎建設のあゆみ

平城京右京一条二坊・二条二坊・一条南大路・西一坊大路の調査

発行年：2018年

発行：独立行政法人 国立文化財機構 奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町 2-9-1